

旧友より執筆依頼を受け、内容についてはお任せするという趣旨でしたので、標題について肩の凝らないものを寄稿することといたしましたので、雑駁な内容ですがお付き合い下さい。

早いものであの震災から 11 年を経て、被災地のそこそこで追悼の式典がしめやかに挙行されるのをご覧になった方も多いと思います。震災発生当時、私はたまたまこの県薬剤師会の災害対策委員会に所属していたため、その後否応なく様々な関連業務に携わり、結果として現在も震災のみならず多くの災害に薬剤師として向き合うことが多くなりました。

既にご承知の方もおられますが、あの日は霞が関の厚生労働省で「医薬分業指導者協議会」が開催され、宮城県はもとより全国から多くの薬剤師会役員が出席しておりました。宮城県からは会長以下 5 名の理事が参加し、天井から降ってくるほこりやごみを受けつつ佐々木前会長が持参した iPad でただならぬ状況を知り、会議中止の声を聴くや否や早々に移動を開始、徒歩で東京駅へ移動しました。途中で多くの耐震ビルが緩やかに振動する間を縫って落下物や渋滞の車を尻目に混乱の東京駅へ到着しましたが、当然のごとく東北新幹線は全面運休、今となっては信じられませんがその頃はまだ「何時間か経てば開通するかもしれない」と駅構内で時間を潰したことから情報の伝播がいかばかりかご理解いただけたと思います。諦めて都内のホテルに宿泊手配をしましたが、報道番組から県下沿岸の信じがたい映像、火災の様子が断片的に届き、安否の取れぬ家族や知人を思いまんじりともせず一夜を明かしました。

翌 12 日午前、井筒前副会長が手配された車を借りて帰途に就き、生元元会長指揮のもと車中で災害掲示板を立上げ、情報収集を開始し、所々断線不通の高速道路を何とか走破して 13 日未明、全く人工的な光の無くなった星明りの宮城県に到着しました。県薬会館は電気、ガス、水道、電話、インターネット、全て不通のため、県庁のすぐ裏手にあるおいで薬局に災害対策本部を立上げ、県薬務課との打合せや、医薬品の供給対策、会員の安否、被災地状況確認を開始しました。その後の薬剤師会は災害対策一色になり、役員が分担して先遣隊を組織、県内沿岸の被災地区へ赴いて、津波による泥、がれきの中で会員薬局の被害状況・道路状況・医療機関の現状を確認し、連日深夜まで会館に集まって情報共有を行いました。自身も被災している中の労務はつらいものがありましたが、当時の生元会長は連日県薬に寝泊まりし、対策本部 24 時間対応の維持に努めたのですからその覚悟は察するに余りあります。この体制維持には理由があって、全国の様々な団体から寄せられる支援医薬品や物品が県薬宛に絶え間なく届くのですが、余震が続く道路状況が不安定なため搬入時間が定まらず、到着が早朝～深夜になることがざらにあり、巨大なトラックから早急に物資を運び入れる業務が不定期に発生するからです。雪が舞う中の野外作業は長時間に及ぶこともあり、役員は会館セミナーホールを集積所として物品を用途別、薬効別に仕分け、リスト作成に明け暮れました。



連日の災対本部会議



雪の中の支援物資搬入



ホールを席卷する支援物資

日本薬剤師会が募った全国からの支援薬剤師に対し、日常業務や経験年数、支援日数を踏まえて派遣先を選定、ブリーフィング後に被災地に搬送するのも災害対策本部の仕事でした。当時はまだ今ほど被災地支援が一般的ではなかったため、「支援は被災地に負担をかけない」という認識も個人差があった様に思います。(個人の感想です)

もちろん派遣薬剤師は、被災地において医療班同行、医薬品供給体制の構築はもちろんのこと、薬剤師班として避難所の訪問や OTC 管理、お薬相談、飲料水等の衛生管理、害虫駆除などの活動を精力的に実施、復興に貢献し、その後の災害医療の現場において「支援チームの構成に薬剤師は必須である」という認識を被災者のみならず多くの医療関係者、行政、メディア等にもたらしたことは言うまでもないことでしょう。

その頃、被災地支援に連日随行する委員の中で、「Mobile Pharmacy=災害時に医療用医薬品が供給できる特殊車両」という発想が語られるようになりました。そもそも平時には薬局が調剤を行う場所として様々な法規制があることは周知のことで、「移動できる部屋、車、台車等で調剤できたら便利だ」と誰もが一度は思い付いてはみても、具現化には至れないことは容易に想像できます。ですからこの「移動できる薬局」という発想自体は、わたくし自身はそれほど画期的なことだとは考えておりません。現に自家用車を改造して簡易な調剤スペースを備えた車両を考案したという報告は以前からあったと記憶しています。ただ、「Mobile Pharmacy」という単語がという新しい固有名詞として全国的に認知され、今や多くの薬剤師が共通の車両と機能を想起するまでに至っている点においては、一つの功績だろうと考えます。もしあの震災が起こっていなければ、平時に医薬品を調剤、販売が出来ない、維持費だけが発生する車両を具現化することはなかったでしょう。震災に向き合った薬剤師会が被災地医療に携わり、つながりを持った様々な企業の貢献があつての開発であつたことを忘れてはならないと思います。

現在全国 20 台以上製造され所有団体も増えた「Mobile Pharmacy」は、運用する側にその方向性や連携を図るための定期的な情報共有が必須となります。どのような状況下で運用し、どのような時に「運用すべきではない」のか、それを精査せずにやみくもに被災地に赴いても、他の緊急車両の妨げになるだけで本来の機能は発揮されません。運用ありきであってはならないのです。

震災 1 年後の第 45 回日本薬剤師会学術大会静岡大会の展示ブースで「Mobile Pharmacy」を披露し、2,000 名を超える見学者に役員一丸となって対応しました。その後も第 46 回大阪大会で搭載する供給ソフトの開発を発表、第 48 回の鹿児島大会では災害処方せんに関する考察の発表、次いでシンポジウムを実施しました。第 60 回北海道薬学大会では津軽海峡を越えて札幌市へ、第 43 回日本病院薬剤師会関東ブロック学術大会では新潟県新潟市に展示、必要性と有用性を訴えました。第 62 回日本職業・災害医学会学術大会ではパネリストも務め、様々な学会において展示や口頭発表を実施しました。



初期ロゴデザインと実車 (デザインのみ筆者担当)



45 回日薬学術大会静岡大会

薬学教育の現場でも東北医科薬科大学、岩手医科大学、東北大学それぞれの薬学部等で、東日本大震災時の宮城県薬剤師会の対応、「Mobile Pharmacy」の展示供覧を実施しています。石巻赤十字病院との定期的な共同訓練や、岩手県総合防災訓練に岩手県薬剤師会と参画し、八幡平市や釜石市に赴いて、災害時の薬剤師の貢献について訴えました。



第 46 回日薬学術大会大阪大会



岩手県薬剤師会と参画した防災訓練

県医師会や医薬品卸会社への展示広報活動も機会あるごとに実施し、その機能を披露しています。周辺装備や環境の構築も進め、災害優先電話約 30 台による地区薬剤師会との緊急連絡網の構築や、薬剤師会館に医薬品を除く装備品として緊急食糧、カセット式コンロ、電池、発電機、寝袋、簡易ベッド等約 100 品目を備蓄する災害備蓄品保管庫を設置し、有事に備えています。

震災当時に巡回した医療チームが発行した簡易な災害処方せんを作成・運用も災害対策本部が進め、実際に使用された枚数は延べ 90 日で 9,000 枚を超えました。災害処方せんによって緊急的に調剤された被災者の傾向、医療用医薬品の品目や量、薬効等について、のちにレセコン入力して再集計し、除外例を除く 8,389 枚を対象とした解析資料を前述の鹿児島大会にて発表しました。この解析結果を基に、「Mobile Pharmacy」が実際に宮城県丸森町の豪雨災害における支援活動において医療班との「災害医薬品備蓄リスト」として共用、実績を得たことでその実効性が証明されました。



大分熊本地震における支援風景と「Mobile Pharmacy」



丸森町豪雨災害での投薬風景

内閣府、宮城県等が共同で実施する大規模な原子力防災訓練において、薬剤師が安定ヨウ素剤緊急配布訓練に参画、模擬配布と共に住民から寄せられる薬学的相談に対応するようになったのも、震災をきっかけに様々な災害対策会議に参画して新たな繋がりを得た成果であると認識しています。国連防災会議が宮城県仙台市で開催された際は、市民広場に「Mobile Pharmacy」を展示、訪れた海外の要人を相手に英語版リーフレットを作成、情報を供覧しました。

東日本大震災は未曾有の災害であったと同時に、皮肉にも薬剤師が災害支援にどう向き合うかを問い、「Mobile Pharmacy」という一つの形態を創造し、災害医療に携わる様々な職種を結びつけました。震災 11 年を経て、「Mobile Pharmacy」も薬剤師の災害対策も、共に新たな Phase に進むべく今後も様々な知見を重ねていきたいと思っています。